

5年以内になる病気 見える化

AIと暮らす 京都・滋賀のいま

急速に進歩し、世界中で普及が進む人工知能(AI)。2024年のノーベル化学賞・物理賞をAI関連の研究が受賞し、注目集める中、私たちの暮らしにも変化をもたらす存在になりつつある。京都や滋賀で、健康や教育、暮らしに役立つAIが活躍する研究が、現場を取材する。

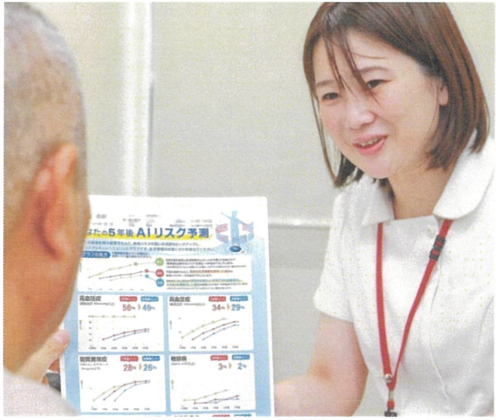
健康診断ビッグデータから予測

「5年後に高血圧症にかかるリスクは26%」。団塊世代の男性(66) 川崎市は2年前、京都平塚保健会(京都市中京区)で受診した人間ドックの結果票に記入された。5年以内の生活習慣病になる確率が1.1%と予測された。タラシ作られていたからだ。

毎日飲酒を欠かさず、運動もせず、メタボ体形。思い当たる節はたくさんあった。要は、生活習慣を改めるリスクが49%に達しても書か、保健から飲酒を控えるよう指導された。だがそれだけでは足りず、と嘆息してしまっていた。

「酒を飲めなくとも歩く距離を増やしたり、食事を減らしたとしても体重を減らすばかりでは効果がない。男性の生活習慣病がAIが導出した助言だ。男性は「毎年、同じような」

■ 予防医療時代へ手助け



AIで予測された生活習慣病発症リスクの結果を見ながら健康指導を受け、男性に飲酒を止めるようアドバイスした。京都平塚保健会(京都市中京区)で取材。安藤文 撮影。一部を加工しています。

個人の健康データ蓄積アプリ普及 治療の質向上、発症前に予兆検知へ

丸中会長は「膨大なデータを有効活用して、健康づくりの意識を向上させることが、健康の質を高め得る」と話す。

この数年、急速に進むAIの普及によって、健康結果から疾病リスクを予測するシステムの開発が全国的にも増えており、同会は積極的に関与している。

今後は、AIサービスを始めた後のデータを解析し、AIの関与が全国的にも増えており、同会は積極的に関与している。

丸中会長は「膨大なデータを有効活用して、健康づくりの意識を向上させることが、健康の質を高め得る」と話す。



毎日の健康データを蓄積できるアプリ「健康日記」。将来的には個人の生涯データを予防医療に役立てる仕組みを開発する構想もある(京都市左京区・ヘルステック研究所)



家庭で精密に測れるというオムロンの血圧計。毎日の変化するデータを活用し、脳や心疾患の発症の予兆を検知するAIを開発中だ(向日市・オムロンヘルスケア)

歩数計や心拍が測れる機能が付いたスマートウォッチや、近距離無線通信Bluetooth(Bluetooth)機能付きの体重計や血圧計アプリを連携させて、毎日の健康データを蓄積する人が増えている。そんなデータを活用して、病気の発症予防に生かそうとする研究も進められている。

京都大共同研究をけん引する「ヘルスマック研究所」(京都市左区)は、アプリ「健康日記」を2020年にリリースし、現在約1万人がダウンロードしている。

「お薬手帳や健康診断の結果、母子手帳などの情報も連携できるため、研究はこれらによって生じた健康データが蓄積された個人の健康データをビッグデータとしてAIで分析し、ライフスタイルと疾病発症との関係性を明らかにする研究の構想もあっている。予防医療の研究に蓄積された健康データが、さまざまな疾病の研究に活用されている」と話す。

個人の日々の健康データを蓄積する企業もある。

AIの力を借りながら、暮らしの中で効率的に健康管理できる未来は、すぐそこまで近づいている。【藤松奈美】